

2. 土地利用の状況

鎌倉市の土地利用は山林が市域の約3割を占めるとともに、住居系用地が約3割を占めている。

山林は市域の東側から西側へ延びる丘陵地に多く立地し、住宅地系用地は谷戸から低地にかけて分布している。

また、商業系用地は鎌倉駅や大船駅周辺の地区に、大規模な工場用地は柏尾川沿いに集中している。

農地は小規模ながら玉縄地区に集中して立地している。

土地利用面積(H12)

土地利用分類名称	面積	
	(ha)	(%)
農地	132.2	3.3
山林	1,319.3	33.4
河川等	147.7	3.7
自然的土地利用計	1599.2	40.5
住居系用地	1,210.2	30.6
商業系用地	110.2	2.8
工業系用地	114.8	2.9
公共・公益系用地	270.3	6.8
宅地計	1,705.5	43.1
オープンスペース	115.1	2.9
その他用地	151.5	3.8
交通施設用地	381.7	9.7
都市的土地利用計	2,353.8	59.5
合計	3,953.0	100.0

表1：鎌倉市の土地利用面積一覧

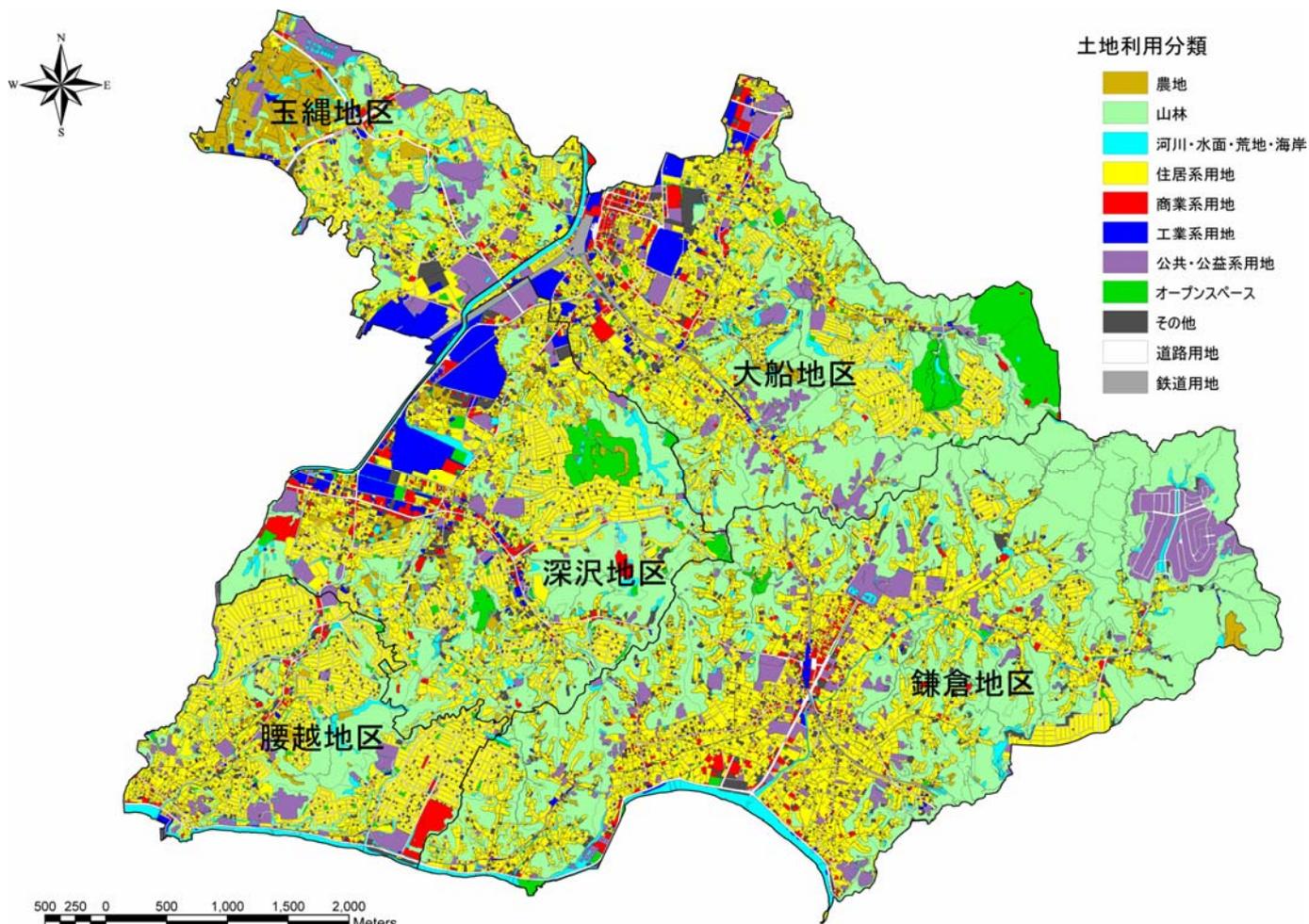


図2：土地利用現況図(H12)

表2：鎌倉市の土地利用面積一覧

土地利用分類		平成2年						平成7年						平成12年						
		市街化区域		市街化調整区域		合計		市街化区域		市街化調整区域		合計		市街化区域		市街化調整区域		合計		
		(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	(ha)	(%)	
自然的土地利用	農地	田	5.5	0.2	3.0	0.2	8.5	0.2	2.3	0.1	1.8	0.1	4.1	0.1	2.9	0.1	1.8	0.1	4.7	0.1
		畑	62.9	2.4	74.5	5.4	137.4	3.5	51.9	2.0	81.8	5.9	133.7	3.4	45.5	1.8	75.2	5.4	120.7	3.1
		耕作放棄地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	0.1	5.5	0.4	9.1	0.2	2.2	0.1	4.6	0.3	6.8	0.2
		農地計	68.4	2.7	77.5	5.6	145.9	3.7	57.8	2.2	89.1	6.4	146.9	3.7	50.6	2.0	81.6	5.9	132.2	3.3
	山林	平坦地山林	38.6	1.5	29.3	2.1	67.9	1.7	30.9	1.2	27.8	2.0	58.7	1.5	28.4	1.1	28.4	2.1	56.8	1.4
		傾斜地山林	410.2	15.9	948.8	68.9	1359.0	34.4	373.9	14.5	942.1	68.2	1316.0	33.3	359.5	14.0	903.0	65.3	1,262.5	31.9
		山林計	448.8	17.4	978.1	71.0	1426.9	36.1	404.8	15.7	969.9	70.2	1374.7	34.8	387.9	15.1	931.4	67.4	1,319.3	33.4
	河川	河川、水路、水面	15.6	0.6	14.2	1.0	29.8	0.8	18.7	0.7	15.0	1.1	33.7	0.9	20.6	0.8	19.1	1.4	39.7	1.0
		荒地、海浜、河川敷	48.2	1.9	48.2	3.5	96.4	2.4	38.2	1.5	38.0	2.7	76.2	1.9	52.7	2.0	55.3	4.0	108.0	2.7
		河川計	63.8	2.5	62.4	4.5	126.2	3.2	56.9	2.2	53.0	3.8	109.9	2.8	73.3	2.9	74.4	5.4	147.7	3.7
	自然的土地利用計		581.0	22.6	1118.0	81.1	1699.0	43.0	519.5	20.2	1112.0	80.5	1631.5	41.3	511.8	19.9	1087.4	78.7	1599.2	40.5
	都市的土地利用	住居系用地	住宅用地	1159.8	45.0	46.5	3.4	1206.3	30.5	985.2	38.3	47.9	3.5	1033.1	26.1	968.0	37.7	48.8	3.5	1,016.8
集合住宅用地			-	-	-	-	-	-	126.8	4.9	0.5	0.0	127.3	3.2	143.8	5.6	0.9	0.1	144.7	3.7
併用集合住宅用地			-	-	-	-	-	-	8.5	0.3	0.1	0.0	8.6	0.2	6.8	0.3	0.1	0.0	6.9	0.2
店舗併用住宅用地			13.4	0.5	0.5	0.0	13.9	0.4	34.7	1.3	0.9	0.1	35.6	0.9	37.5	1.5	0.8	0.1	38.3	1.0
作業所併用住宅用地			1.4	0.1	0.3	0.0	1.7	0.0	6.2	0.2	0.4	0.0	6.6	0.2	3.5	0.1	0.0	0.0	3.5	0.1
住居系用地計			1174.6	45.6	47.3	3.4	1221.9	30.9	1161.4	45.2	49.8	3.6	1211.2	30.6	1,159.6	45.1	50.6	3.7	1,210.2	30.6
商業系用地		業務施設用地	-	-	-	-	-	-	25.0	1.0	3.9	0.3	28.9	0.7	30.6	1.2	16.3	1.2	46.9	1.2
		商業用地	51.8	2.0	5.6	0.4	57.4	1.5	28.3	1.1	0.0	0.0	28.3	0.7	42.6	1.7	0.4	0.0	43.0	1.1
		宿泊娯楽施設用地	-	-	-	-	-	-	21.9	0.9	1.9	0.1	23.8	0.6	17.8	0.7	2.5	0.2	20.3	0.5
		商業系用地計	51.8	2.0	5.6	0.4	57.4	1.5	75.2	2.9	5.8	0.4	81.0	2.0	91.0	3.5	19.2	1.4	110.2	2.8
工業系用地		重化学工業用地	-	-	-	-	-	-	42.0	1.6	0.0	0.0	42.0	1.1	10.2	0.4	0.0	0.0	10.2	0.3
		軽工業用地	117.4	4.6	0.8	0.1	118.2	3.0	62.1	2.4	0.9	0.1	63.0	1.6	81.8	3.2	1.0	0.1	82.8	2.1
		運輸施設用地	12.5	0.5	1.5	0.1	14.0	0.4	18.2	0.7	2.0	0.1	20.2	0.5	18.5	0.7	3.3	0.2	21.8	0.6
		工業系用地計	129.9	5.0	2.3	0.2	132.2	3.3	122.3	4.8	2.9	0.2	125.2	3.2	110.5	4.3	4.3	0.3	114.8	2.9
公共系用地		公共用地	18.6	0.7	2.4	0.2	21.0	0.5	5.7	0.2	0.1	0.0	5.8	0.1	5.9	0.2	0.0	0.0	5.9	0.1
		文教・厚生用地	154.9	6.0	109.6	8.0	264.5	6.7	148.3	5.8	101.1	7.3	249.4	6.3	148.0	5.8	89.1	6.4	237.1	6.0
		供給処理施設用地	-	-	-	-	-	-	15.4	0.6	12.7	0.9	28.1	0.7	15.0	0.6	12.3	0.9	27.3	0.7
公共系用地計		173.5	6.7	112.0	8.1	285.5	7.2	169.4	6.6	113.9	8.2	283.3	7.2	168.9	6.6	101.4	7.3	270.3	6.8	
宅地計		1529.8	59.4	167.2	12.1	1697.0	42.9	1528.3	59.4	172.4	12.5	1700.7	43.0	1,530.0	59.5	175.5	12.7	1,705.5	43.1	
オープンスペース		30.6	1.2	52.0	3.8	82.6	2.1	58.2	2.3	54.8	4.0	113.0	2.9	53.0	2.1	62.1	4.5	115.1	2.9	
その他用地		その他の空き地	98.2	3.8	18.9	1.4	117.1	3.0	133.7	5.2	17.4	1.3	151.1	3.8	133.8	5.2	17.7	1.3	151.5	3.8
	防衛用地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	その他用地計	98.2	3.8	18.9	1.4	117.1	3.0	133.7	5.2	17.4	1.3	151.1	3.8	133.8	5.2	17.7	1.3	151.5	3.8	
交通施設用地	道路用地	300.1	11.7	20.1	1.5	320.2	8.1	302.4	11.8	23.4	1.7	325.8	8.2	321.0	12.5	38.1	2.8	359.1	9.1	
	鉄道用地	35.3	1.4	1.8	0.1	37.1	0.9	28.9	1.1	2.0	0.1	30.9	0.8	21.4	0.8	1.2	0.1	22.6	0.6	
	交通施設用地計	335.4	13.0	21.9	1.6	357.3	9.0	331.3	12.9	25.4	1.8	356.7	9.0	342.4	13.3	39.3	2.8	381.7	9.7	
都市的土地利用計		1994.0	77.4	260.0	18.9	2254.0	57.0	2051.5	79.8	270.0	19.5	2321.5	58.7	2,059.2	80.1	294.6	21.3	2,353.8	59.5	
合計		2575.0	100	1378.0	100	3953.0	100	2571.0	100	1382.0	100	3953.0	100	2,571.0	100	1,382.0	100	3,953.0	100	

資料：鎌倉市

3. 鎌倉市の人口推移

鎌倉市の過去10年間の世帯数ならびに人口総数をみると、平成5年に約63,000世帯、約172千人であった人口は平成10年まで減少しつづけたが、再び平成14年から増加傾向にあり、平成16年現在で世帯数約69,000世帯、人口約17万人となっている。

地域別にみると人口が最も多いのが鎌倉地域で、次に大船地域と続く。

表3：人口・世帯数の推移

(各年10月1日現在)

年 別	世 帯 数	人 口			男 女 比 (女100人 につき男)	備 考
		総 数	男	女		
5年	63,176	172,638	83,844	88,794	94.4	〃
6年	63,526	171,815	83,192	88,623	93.9	〃
7年	63,099	170,329	82,323	88,006	93.5	第16回国勢調査
8年	63,154	168,569	81,172	87,397	92.9	人口統計調査
9年	63,515	167,661	80,665	86,996	92.7	〃
10年	64,097	167,136	80,358	86,778	92.6	〃
11年	64,928	167,627	80,484	87,143	92.4	〃
12年	65,344	167,583	80,533	87,050	92.5	第17回国勢調査
13年	66,060	167,435	80,380	87,055	92.3	人口統計調査
14年	66,918	167,630	80,358	87,272	92.1	〃
15年	67,950	168,724	80,638	88,086	91.5	〃
16年	68,984	169,866	81,066	88,800	91.3	〃

図3：鎌倉市の人口推移

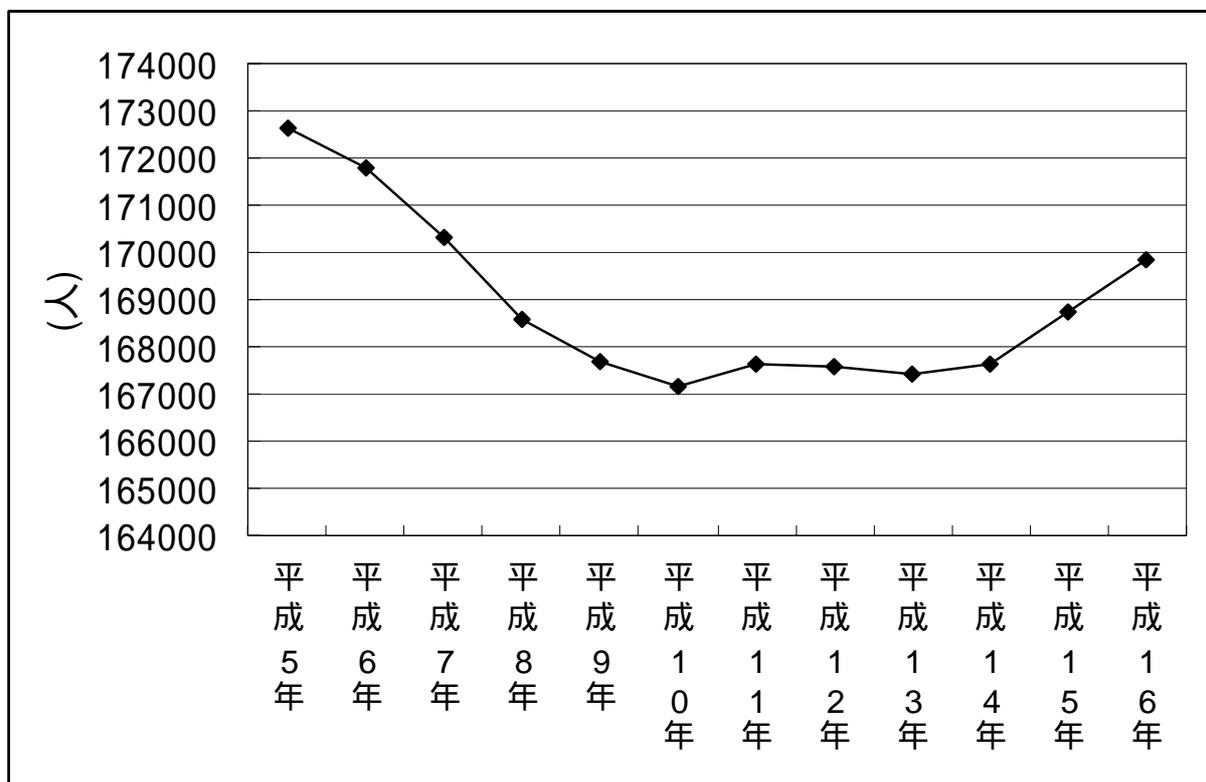


表4：地域別人口と世帯の推移

単位：世帯・人

(各年10月1日現在)

地 域		平成 7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	
総 数	世帯数	63,099	63,154	63,515	64,097	64,928	65,344	66,060	66,918	67,950	68,984	
	人 口	計	170,329	168,569	167,661	167,136	167,627	167,583	167,435	167,630	168,724	169,866
		男	82,323	81,172	80,665	80,358	80,484	80,533	80,380	80,358	80,638	81,066
		女	88,006	87,397	86,996	86,778	87,143	87,050	87,055	87,272	88,086	88,800
鎌 倉 地 域	世帯数	17,395	17,448	17,541	17,686	17,869	17,963	18,232	18,501	18,838	19,160	
	人 口	計	46,389	46,011	45,851	45,636	45,530	45,598	45,656	45,767	46,071	46,420
		男	21,340	21,116	21,022	20,907	20,896	20,940	20,968	21,025	21,125	21,243
		女	25,049	24,895	24,829	24,729	24,634	24,658	24,688	24,742	24,946	25,177
腰 越 地 域	世帯数	8,855	8,956	9,130	9,225	9,372	9,419	9,515	9,522	9,661	9,778	
	人 口	計	25,792	25,658	25,872	25,748	25,766	25,729	25,661	25,434	25,560	25,659
		男	12,231	12,102	12,224	12,200	12,181	12,223	12,131	11,989	12,037	12,091
		女	13,561	13,556	13,648	13,548	13,585	13,506	13,530	13,445	13,523	13,568
深 沢 地 域	世帯数	12,698	12,658	12,664	12,797	12,945	12,927	13,087	13,187	13,505	13,644	
	人 口	計	35,085	34,565	34,124	34,113	34,038	33,741	33,654	33,425	33,843	33,996
		男	17,480	17,146	16,929	16,865	16,778	16,618	16,551	16,414	16,502	16,534
		女	17,605	17,419	17,195	17,248	17,260	17,123	17,103	17,011	17,341	17,462
大 船 地 域	世帯数	15,999	15,943	16,099	16,284	16,333	16,555	16,535	16,755	16,818	17,130	
	人 口	計	40,431	39,920	39,735	39,746	39,662	39,839	39,434	39,688	39,811	40,204
		男	20,126	19,797	19,679	19,693	19,599	19,659	19,451	19,533	19,552	19,689
		女	20,305	20,123	20,056	20,053	20,063	20,180	19,983	20,155	20,259	20,515
玉 縄 地 域	世帯数	8,152	8,149	8,081	8,105	8,409	8,480	8,691	8,953	9,128	9,272	
	人 口	計	22,632	22,415	22,079	21,893	22,631	22,676	23,030	23,316	23,439	23,587
		男	11,146	11,011	10,811	10,693	11,030	11,093	11,279	11,397	11,422	11,509
		女	11,486	11,404	11,268	11,200	11,601	11,583	11,751	11,919	12,017	12,078

資料：鎌倉市総務課（注）1. 平成7年、12年は国勢調査の確定値である。

2. 上記以外の年は国勢調査人口を基礎として、住民基本台帳及び外国人登録の増減を加減して推計したものである。

4．鎌倉市の都市形成と歴史的資産

(1) 鎌倉市の都市形成

鎌倉の発祥

鎌倉では後期旧石器時代の2万年前位に人がいたことが確認され、縄文時代後期の4千5百年位前には鎌倉地区の谷戸奥に人が住んでいたことが、2千年くらい前の弥生時代後期には村が造られていた事が確認される。古墳時代後期には古墳が造られたようで、この頃、鎌倉は相模国の中心の一つとなり、奈良時代になると相模国に置かれた郡の一つとなった。712年(和銅5年)に完成した「古事記」には「鎌倉之別」の名が記されている。

奈良時代

鎌倉市役所に隣接する市立御成小学校の校庭からは8世紀～10世紀に至る役所の跡が発掘され、天平五年(733)銘の木簡が出土している。また由比ガ浜では同時代の集落が発見され、「神主」と書いた須恵器と占骨が出土している。また、同年銘の綾瀬市早川の宮久保で出土した木簡には「鎌倉郡鎌倉里」と墨書されており、御成小学校校庭で発見された遺跡はこの「鎌倉郡衛」、由比ガ浜の遺跡は神祇官の役所ではないかと推定されている。

平安時代

源氏と鎌倉のつながりは、源頼義が平直方の娘を娶り、鎌倉の屋敷を譲られたことに始まる。頼義は康平六年(1063)鎌倉郷由比に八幡若宮(元八幡)を造営し、子の義家はこれを修理している。孫の義朝は寿福寺付近に館を構え、天養二年(1144)には鎌倉を拠点に大庭御厨に侵入している。頼朝の兄義平は「鎌倉悪源太」と称し、鎌倉に住んだと考えられている。鶴岡八幡宮の境内からは源氏が鎌倉の拠点を失った12世紀後半の墓が発見され、五輪板塔婆が出土していることから、鎌倉時代以前においても京都の文化が直接波及する地であったと考えられている。

鎌倉幕府の成立

周囲を山で囲まれ一方を海に面した鎌倉は源氏が代々伝えてきた太平洋側の海上交通と東京湾の内海水上交通の双方を扼する交通の要衝の地であり、要害の地であった。治承4年(1180)反乱軍を率いて鎌倉に入った源頼朝は鎌倉に拠って武家の政権を開き、以後鎌倉は享徳4年(1455)足利成氏が下総古河に移るまで武家政権の政権所在地として栄えた。

鎌倉から室町時代

頼朝は大倉御所を荏柄天神社の西に造営し、鶴岡八幡宮を由比郷から現在の地に移し、周辺に持仏堂(後の法華堂)・永福寺などを造営し、神仏に守護されて政権を開いた。八幡宮から海に至る直線の参道は若宮大路と呼ばれ、御所が若宮大路に遷されると鶴岡八幡宮は鎌倉の中心となり、若宮大路は都市の中軸線となった。

承久4年(1221)に興った承久の乱に勝利した北条義時は北条政子・大江広元らと武家政権を確立し、ここで貞永式目という武家の法を作り、南宋文化を受け入れて独自の文化を創りあげた。

承久の乱後、鎌倉は日本の首都として都の造営が急速に行なわれ、貞永元年(1232)和賀江嶋^{わかえのしま}が築かれて海上交通の拠点となり、材木座が作られた。仁治元年(1240)に巨福呂坂、翌年朝夷名^{あさひな}切通^{きりとおし}が切り開かれ、切通道が整備された。建長四年(1252)深沢に銅造大仏の鑄造が始められ、北条氏の拠点となった山ノ内では建長寺・円覚寺などの造営が行なわれて「まち」の領域が拡大したが、北条氏は切通の周辺に館と氏寺を築いて交通路の支配と防御の拠点とした。

鎌倉の市街地の行政は政所がこれを行い、保奉行人^{ほのぶぎょうにん}が置かれて道の保全・清掃・かがり屋の管理、通行人の取り締まり、不法な商行為、人身売買、賭博の禁止などを行なった。建長三年(1251)・文永二年(1260)には大町・小町など商業地区が定められた。鎌倉のまちの繁栄の様子は「海道記」・「とわずがたり」に一般の人家が多く、港が賑わっている様子などが描かれている。発掘調査でも海岸には半地下式倉庫群が存在し、街中は方形に区画された小さな区画に家が立ち並んでいた様子が確認されている。

元弘三年(1333)鎌倉攻めによって鎌倉幕府が滅びた後、鎌倉は足利氏が浄明寺の公方屋敷を拠点に鎌倉府と呼ばれる政権を確立し、鎌倉は東国の政治都市として発展した。鎌倉五山はこの時期に確立し発展したが、鎌倉府は室町幕府と対立し、以後衰退した。

江戸時代

江戸時代、鎌倉は多くの寺社領と天領、旗本領が入り混じり、鎌倉とその周辺を支配するために代官所が配置されていた。また、幕府が段銭や棟別銭を寺社領にもかけたために、特に幕府の保護を受けていた鶴岡八幡宮、東慶寺、英勝寺、光明寺、円覚寺、建長寺などを除いてその勢いが衰えた。

明治以降第二次世界大戦まで

鎌倉は1868年に葦山県の飛地となったが、すぐに神奈川県に属することになった。同年に神仏分離例が出された後に、鶴岡八幡宮では多宝塔・伽藍が破壊され、寺院も仏教を排斥する廃仏毀釈運動により打撃を受けた。

しかし、1880年ドイツ人ベルツが鎌倉を良好な保養地として紹介したこと、長与専斎が「鎌倉こそ理想的な海である」と紹介したことなどから保養地、別荘地として広く知られるようになった。

大正・昭和初期

1931年腰越津村が腰越町となり、1933年には小坂村が大船町になり、同年に玉縄村を編入した。この頃より鎌倉町では市政施行の準備をはじめ1939年に腰越町と合併して鎌倉市が誕生した。また、1934年には久米正雄、大仏次郎など鎌倉の文化人によって鎌倉カーニバルが始められ、鎌倉は「海の銀座」と呼ばれた。

戦後

戦災を受けなかった鎌倉は、昭和 30 年代からの高度経済成長のもとで、居住・交通などの快適性や利便性から、宅地開発が進められた。特に旧市街地の外側の区域では大規模な宅地開発が行われ、風致地区の指定はなされたものの、当該築内における行為規制は開発を全面的に排除する性格のものでないため、緑地の減少などの事態に対応する必要があった。

1964 年の鶴岡八幡宮の裏山「御谷」地区における宅地開発が計画されたことが一つの契機となり、鎌倉風致保存連盟ならびに（財）鎌倉風致保存会が発足した。このような文化人などの活動などがきっかけとなって、「古都保存法」が制定され、鎌倉市の貴重な緑地である「歴史的風土」の保全が進められてきた。

資料：「こども風土記：鎌倉市」他

図4：明治期の鎌倉の様子（明治24年）

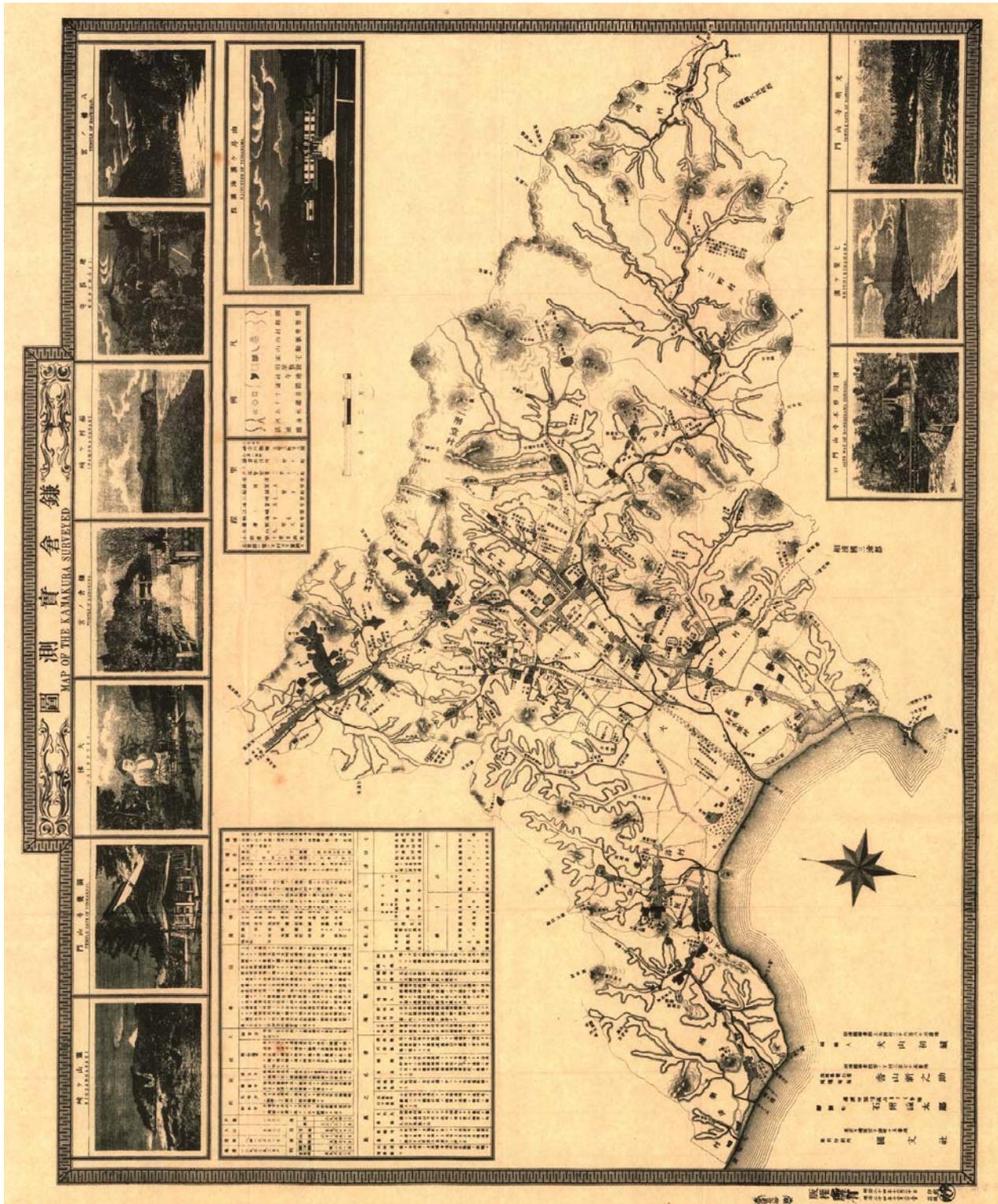
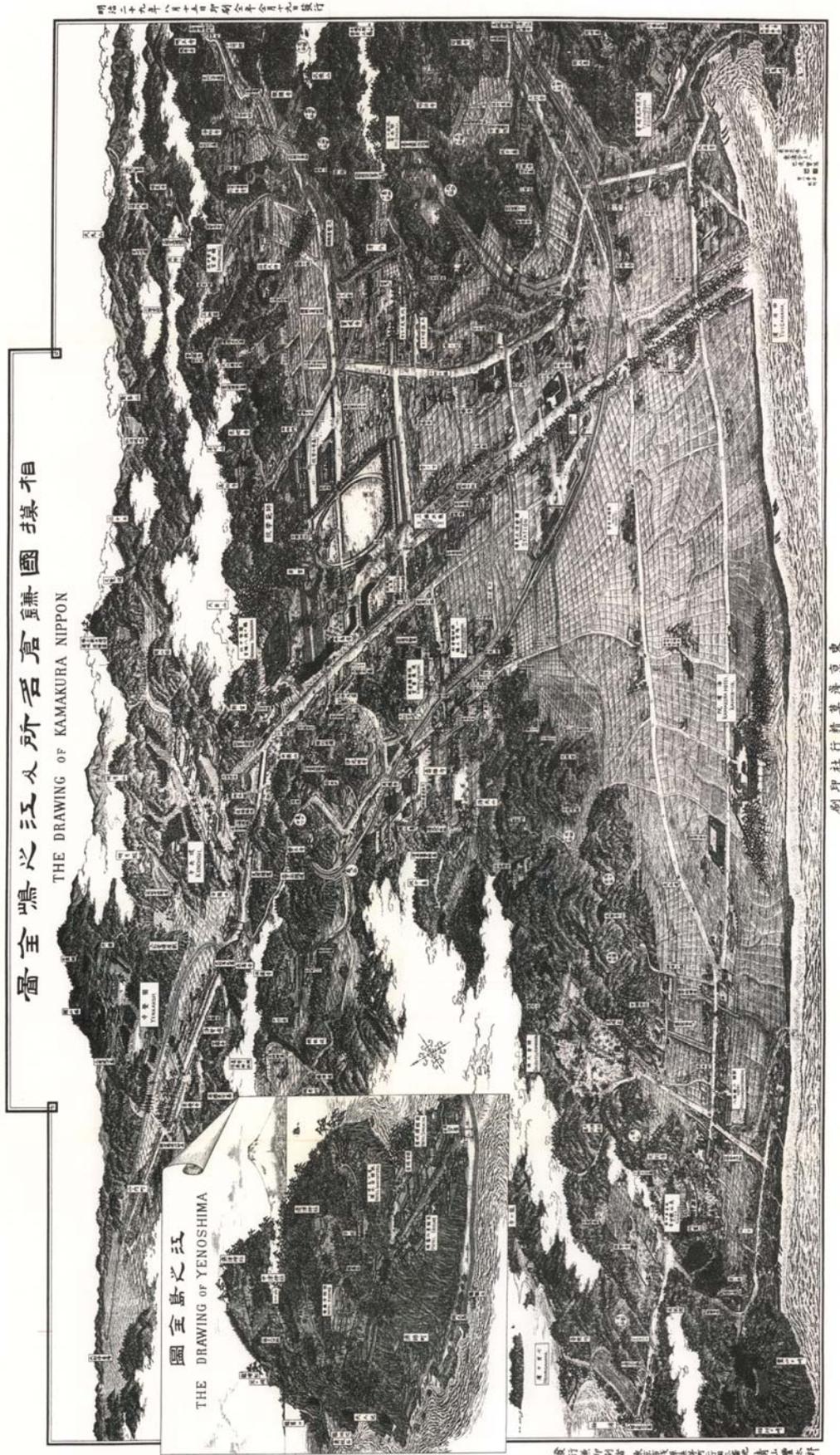
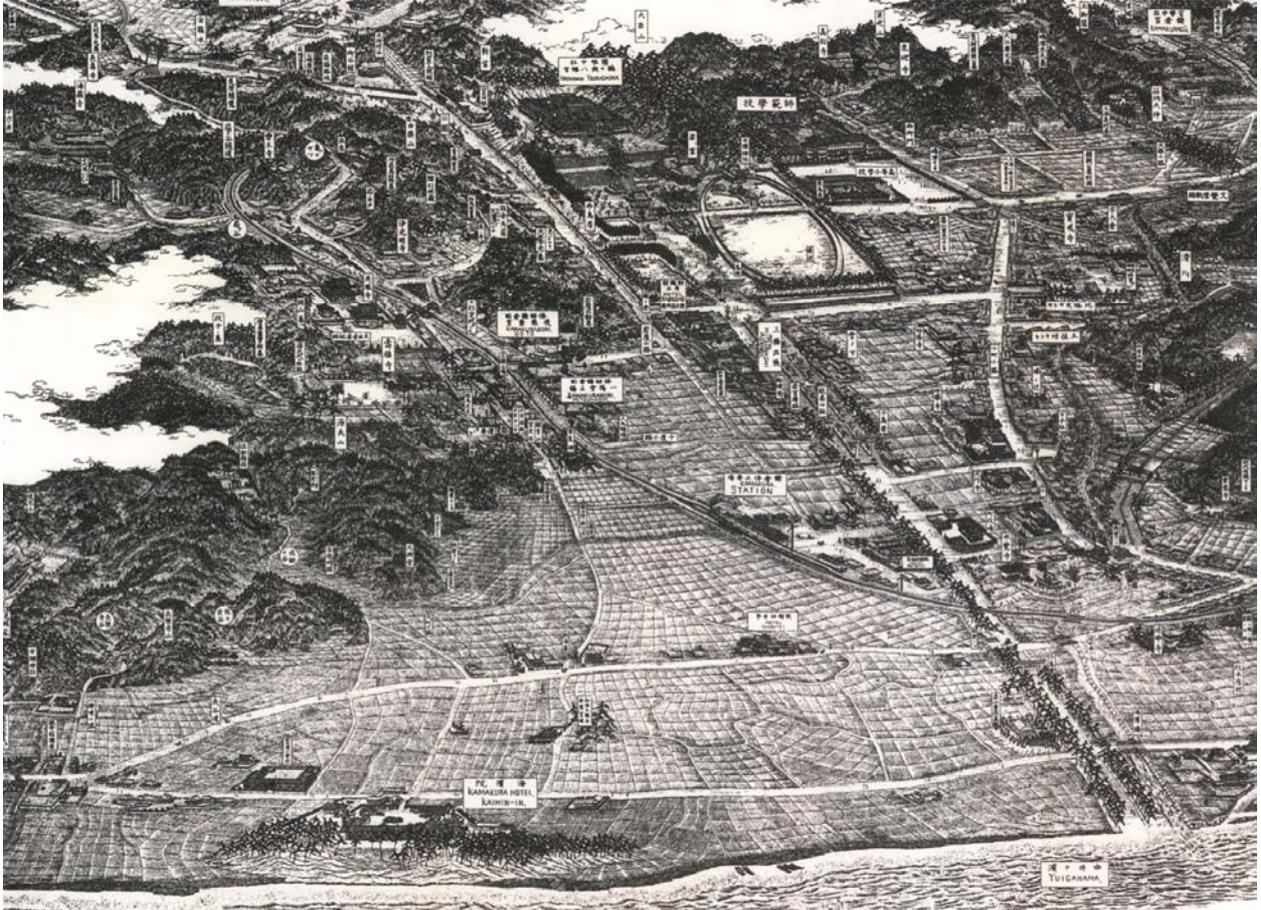


図5 - 1 : 明治期の鎌倉の様子 (明治29年)



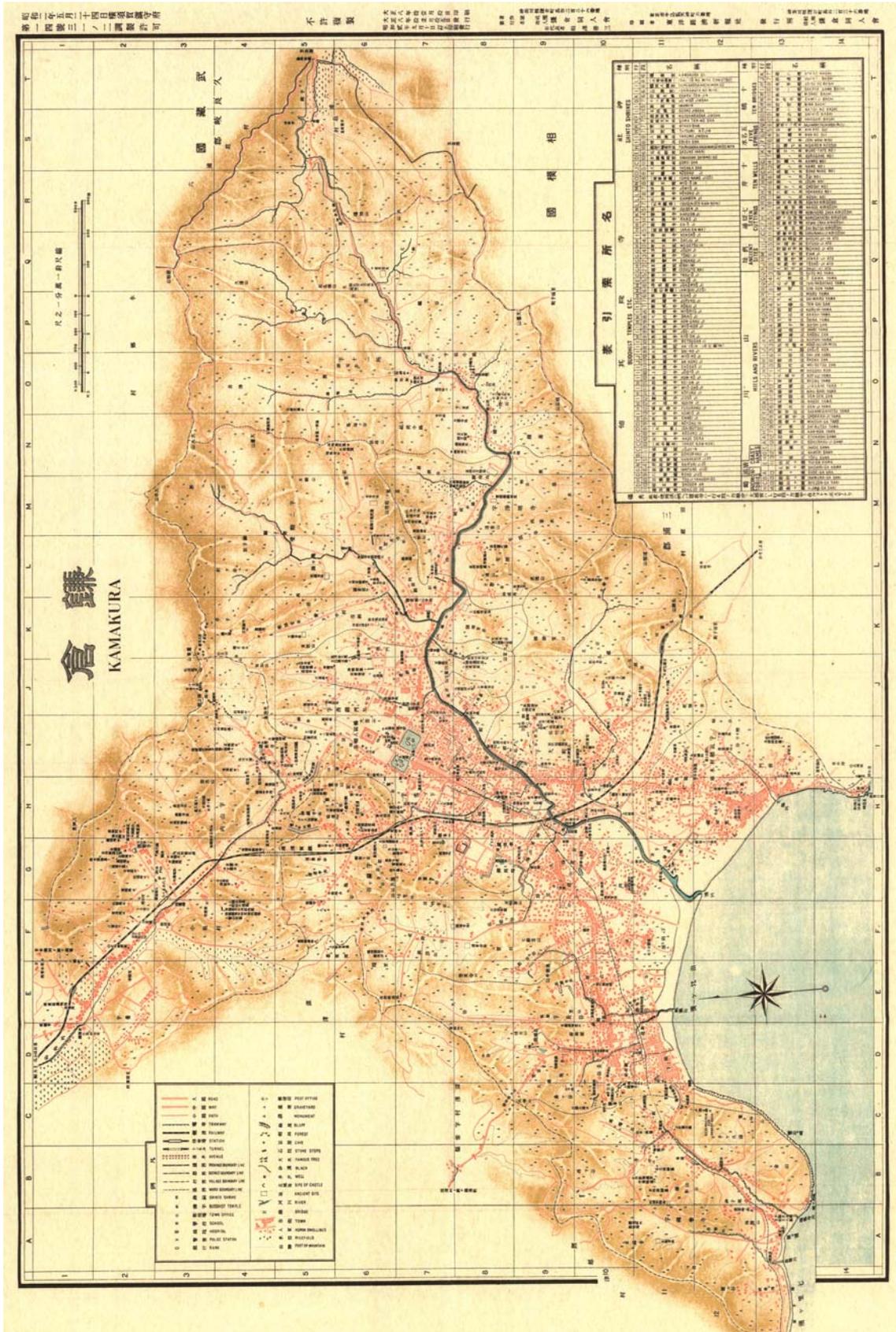
出典：鎌倉市資料

図5 - 2 : 明治期の鎌倉の様子 (拡大) (明治29年)



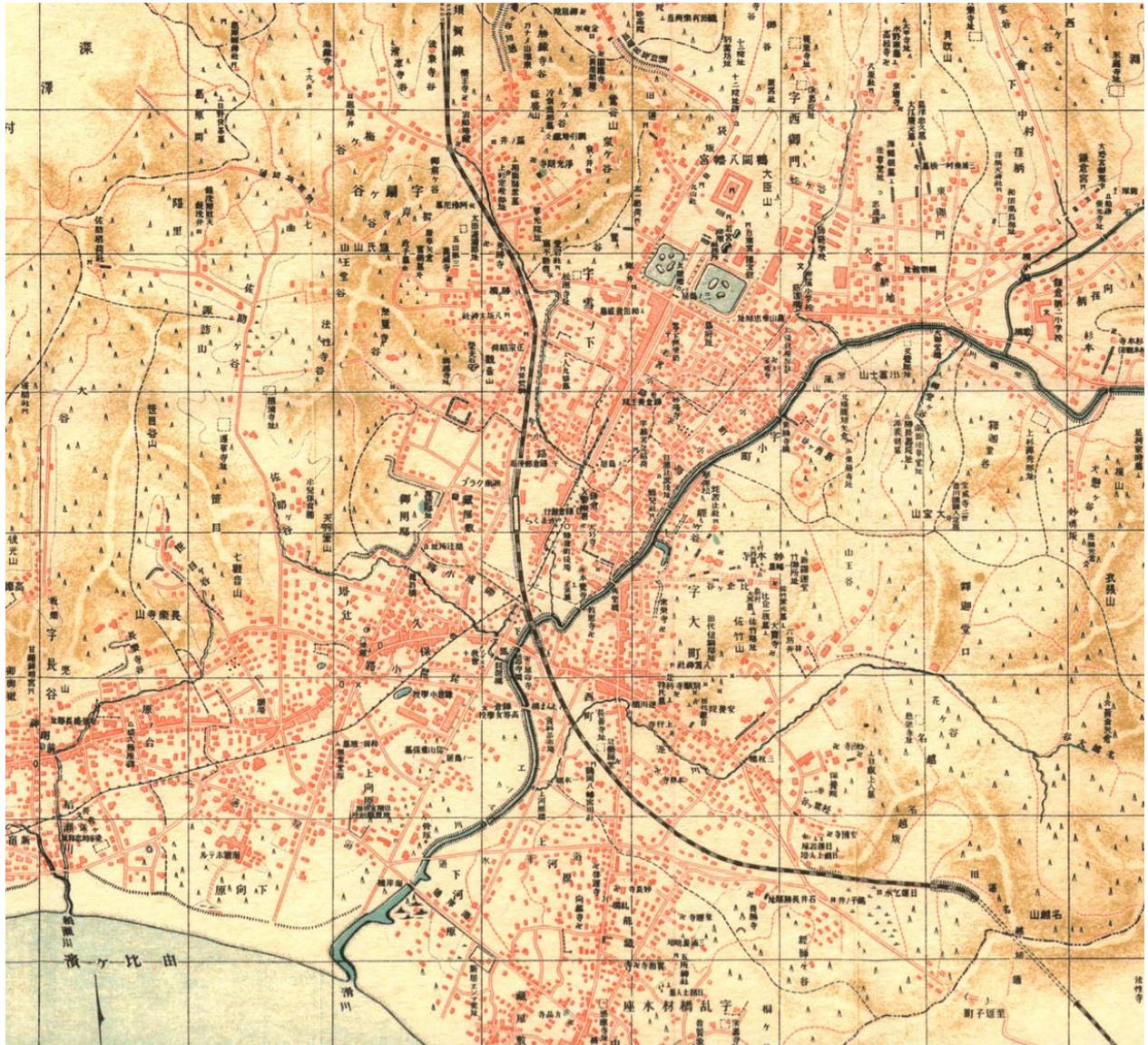
出典：鎌倉市資料

図6 - 1 : 大正期の鎌倉の地図



出典：鎌倉市資料

図6 - 2 : 大正期の鎌倉の地図 (拡大)



出典：鎌倉市資料

(2) 鎌倉市の歴史資産

城郭都市鎌倉の特徴

往時の鎌倉は三方を山に囲まれ、一方が海に開かれた天然の要害としての地形によって構成されていた。平坦地とこれに連なる谷戸を中心に市街地が形成され、行政施設や御家人の屋敷、社寺が配置されていた。また、これらに通じる山々には外部とつなぐ交通路や、防衛のための砦として切り通しが7箇所設けられていた。

武家政権の鎮護の目的で 1180 年に鶴岡八幡宮が建てられ、鶴岡八幡宮から由比ガ浜まで南北一直線に通る参道「若宮大路」が都市の軸線となった。

都市の発展とともに平地の少ない鎌倉では谷戸の開発が進んだ。鎌倉時代には禅宗が武家に最も受け入れられ、13 世紀後半以降、この谷戸の造成地に南宋の様式を取り入れた、鎌倉五山に代表される建長寺などの大禅宗寺院が建てられた。

また、「切岸」は谷戸の造成によって形成される、山を垂直に切り落とした人工的な崖であり防衛的施設の性格も持つが、ここには武家や僧侶の墓所を岩穴内に表現する「やぐら」がつけられた。

現在では、これらの城郭都市鎌倉の遺構が緑に覆われ、鎌倉特有の歴史的風土となっている。

図 7：鎌倉の都市構造



出典：「武家の古都鎌倉 世界遺産の登録をめざしてー」鎌倉市

図 8 : 中世鎌倉模型写真 (国立歴史民俗博物館所蔵)



出典：鎌倉市緑の基本計画（緑の施策の展開と実績）

鎌倉の代表的な歴史資産

1) 都市の基軸



若宮大路

(1182年に鶴岡八幡宮社殿から海まで一直線に伸びる参道がつくられたが、若宮大路は聖なる位置とされ、有力御家人のみがその付近に居を構えることを許された。敵が侵入してきた場合に防御の役割を持つ「段葛」と呼ばれる小高い道が中央に設けられている)

2) 大禅宗寺院



建長寺（鎌倉五山第一位の寺。北条時頼が建立）



円覚寺（鎌倉五山第2位の寺院で禅宗様建築の典型とされる舍利殿は国宝に指定。谷戸を切り開いた階段状の平場に建立）

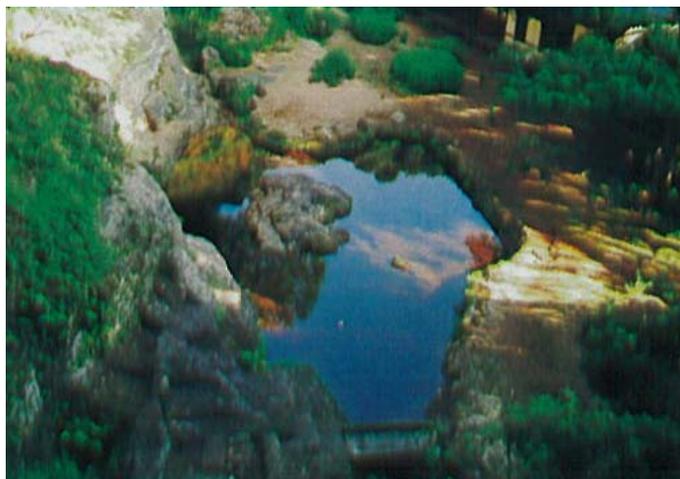
3) 谷戸開発の地形・景観



切岸（山肌を垂直に切り落とした人工的な崖。平場の造営や石切に伴いつくられ、防衛的な性格を持つ）

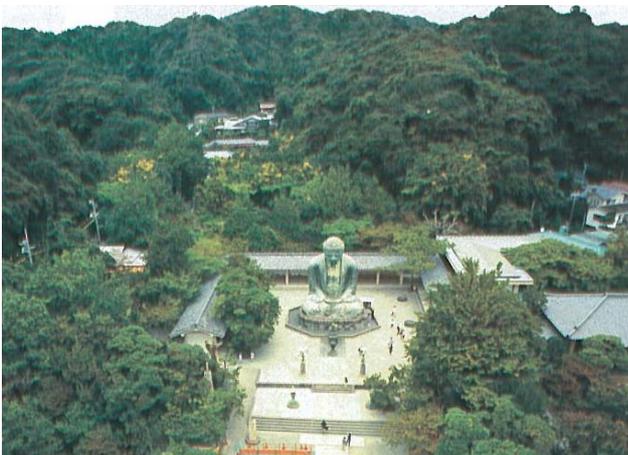


やぐら（岩窟を指す鎌倉地方の用語で中世横穴式墳墓の一様式。切岸を利用してつくられており埋葬のための墳墓窟と供養の場としての仏殿2つの機能を備えている）



瑞泉寺の庭園（夢窓疎石によって開創された寺、庭園は谷を切り開いた奥の岩盤をくりぬき、彫刻的手法によってつくられた禅宗庭園）

4) 武家が重んじた信仰空間



鎌倉大仏殿跡（高德院の本尊。当初あった大仏殿は天災で倒壊、再建を繰り返したが明応4年（1495）の大津波で押し流された後は露座のままとなっている。国宝）



永福寺跡（源頼朝が建立した三大寺院の一つ）

文化財等の現況

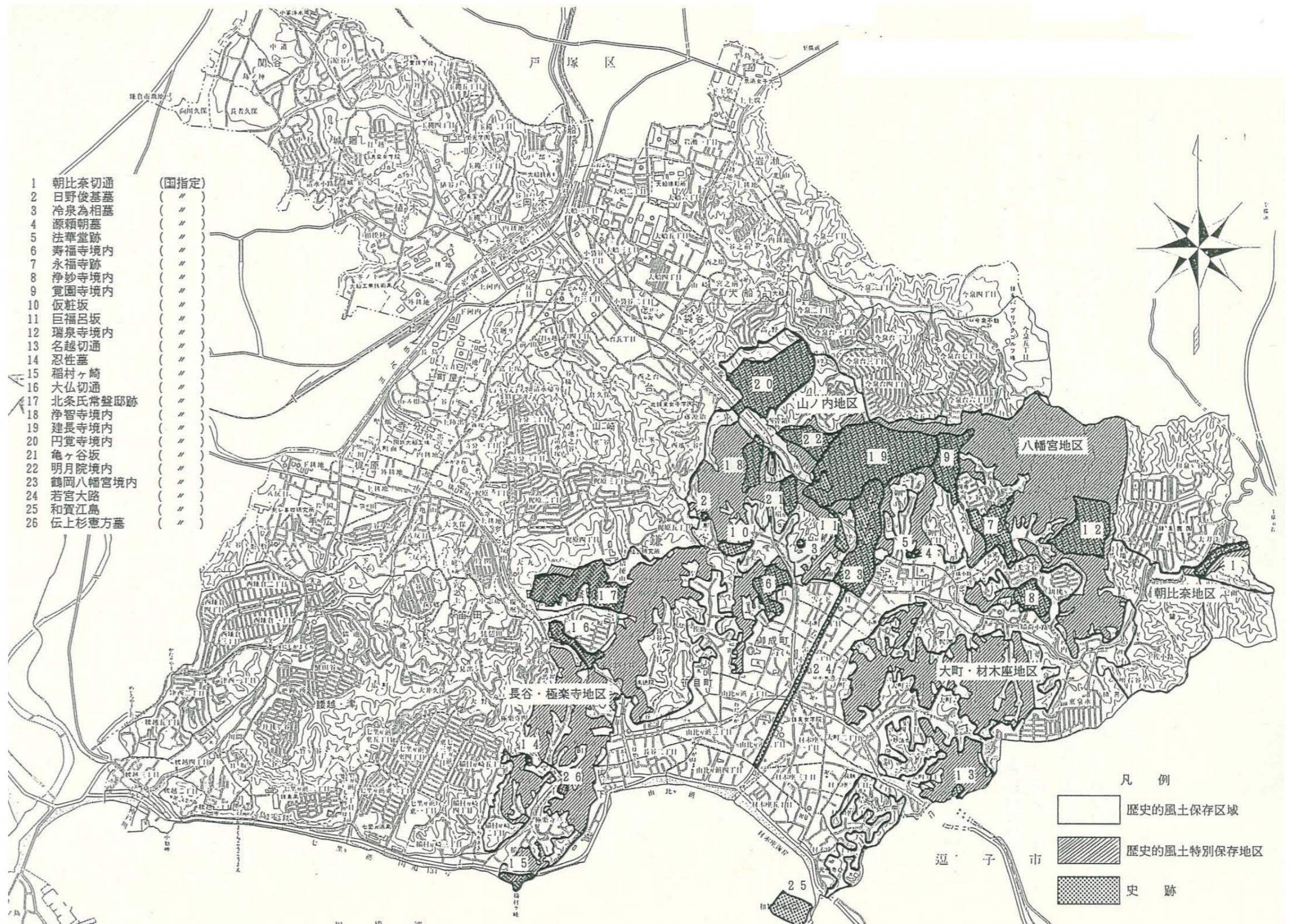
鎌倉市における文化財は国宝が 15 件のほか、有形文化財、史跡、名勝をあわせた国指定の文化財が 195 件、県指定、市指定も含めて 556 件の文化財が指定されている。

表 5：鎌倉市における指定文化財件数一覧

種別		国宝	国指定	県指定	市指定	合計
有形文化財	建造物	1	21	13	31	66
	絵画	4	28	9	42	83
	彫刻	1	35	26	74	136
	工芸	6	22	14	23	65
	書跡	3	46	2	19	70
	典籍				4	4
	古文書		8		7	15
	考古資料		4	2	7	13
	歴史資料				2	2
無形文化財				2	2	
民族文化財（資料）	有形			2	21	23
記念物	無形			1		1
	史跡		28	2	9	39
	名勝		3			3
	天然記念物			1	33	34
合計		15	195	72	274	556

資料：鎌倉市、「鎌倉の指定・登録文化財目録」

図9：鎌倉の歴史的遺構の分布と歴史的風土保存区域



(平成12年1月現在)

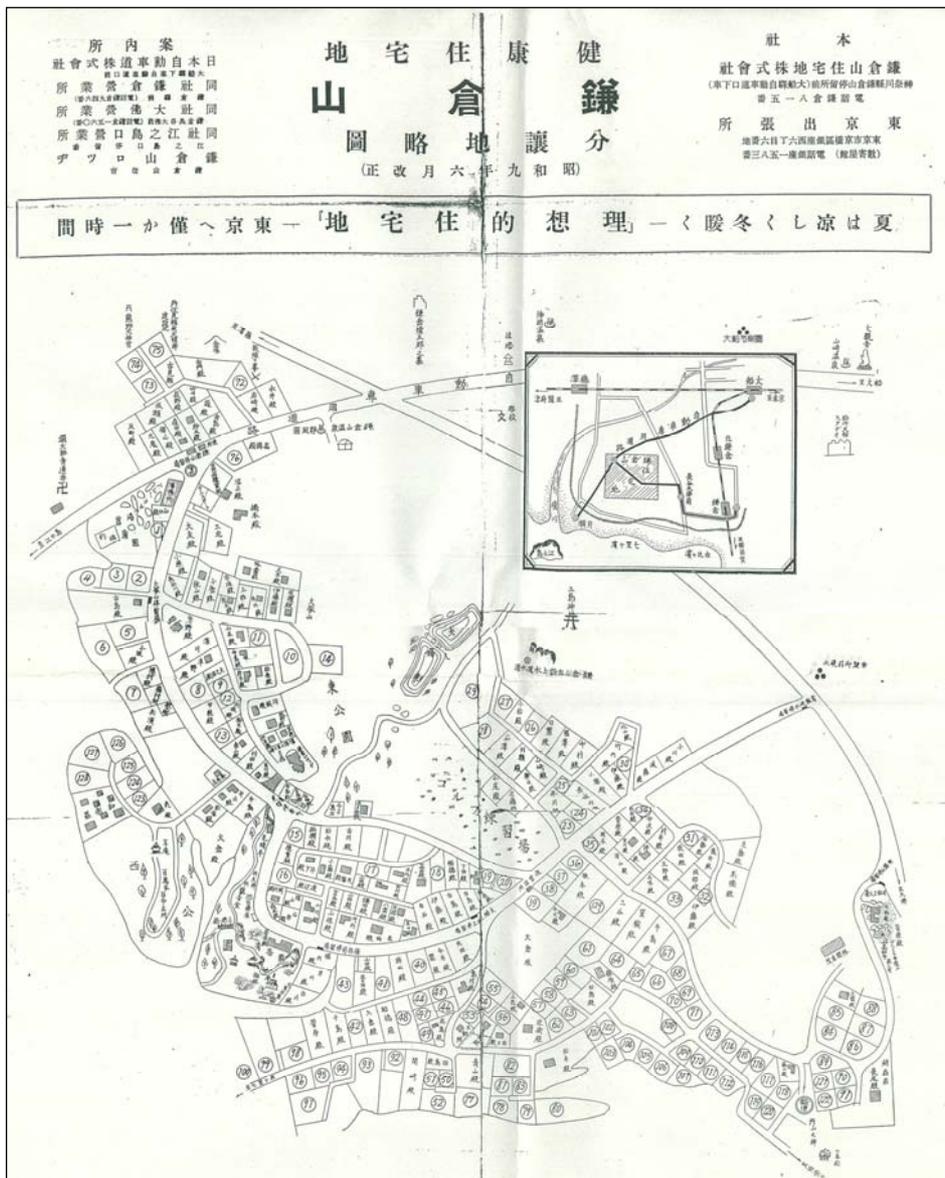
(3) 大正・昭和初期以降の歴史的・文化的資産等

鎌倉山の開発

「鎌倉山」の名称は古くは平安時代（約 1000 年）より使われており、当時は鎌倉を取り巻く山々を総称して鎌倉山と呼んでいた。現在の地名は「散策するのに 良い鎌倉の山道」が略されて「鎌倉山」として一般に普及している。

昭和初期、実業家の菅原通済が「鎌倉山」と名づけた別荘地造成を開始、昭和 4 年（1929 年）から分譲された。日本初の自動車専用道路を備えた高級別荘地であり、近衛文麿、徳川家達、大蔵大臣三土忠造、大倉組頭取大倉喜七郎、秩父鉄道社長末山熊次郎、オペラ歌手藤原義江、歌舞伎俳優の市村羽左衛門、松本幸四郎、映画俳優の田中絹代など、多くの著名人が居を構えた。地形に逆らわない優れた造成計画、分譲敷地内に植栽されたソメイヨシノにより、現在も緑豊かな高級住宅地として著名であるほか、鎌倉市の桜の名所の一つとなっている。新都市計画法（昭和 44 年施行）の施行当初から市街化調整区域に編入されている。

図 10：昭和 9 年の鎌倉山における住宅地開発状況



出典：鎌倉山土地株式会社創立事務所「鎌倉山グラフ」

鎌倉山健康住宅地

風光明媚・設備完備・東京通勤

僅か一時間

坪当り

¥857

十萬坪分譲突破紀念

特價提供

雨び来ない

絶好の機會

僅か百二十五口

一〇、六千坪で七百坪

先づ見られよ!

申込みれよ!

詳細は左記へパンフレット呈上
乗合自動車バス

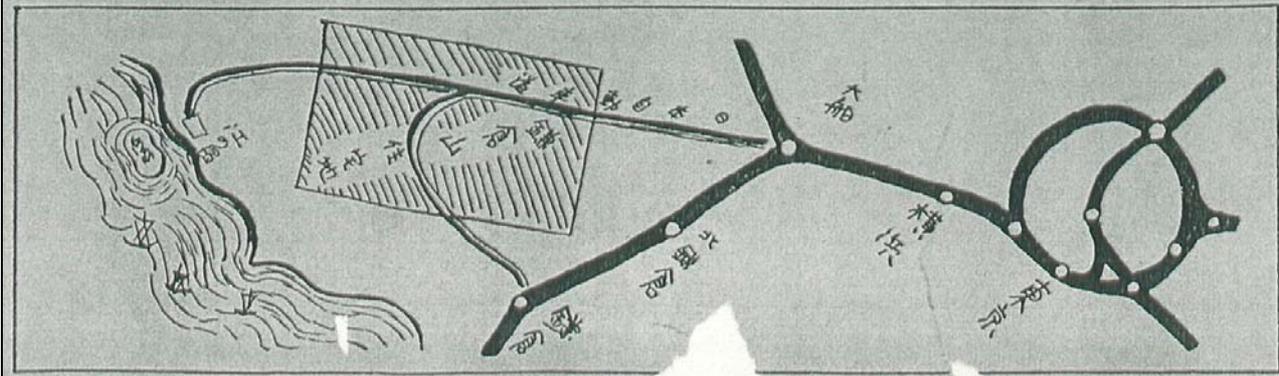
鎌倉山土地株式会社(創立事務所)

東京銀座西六六敷寄屋館内

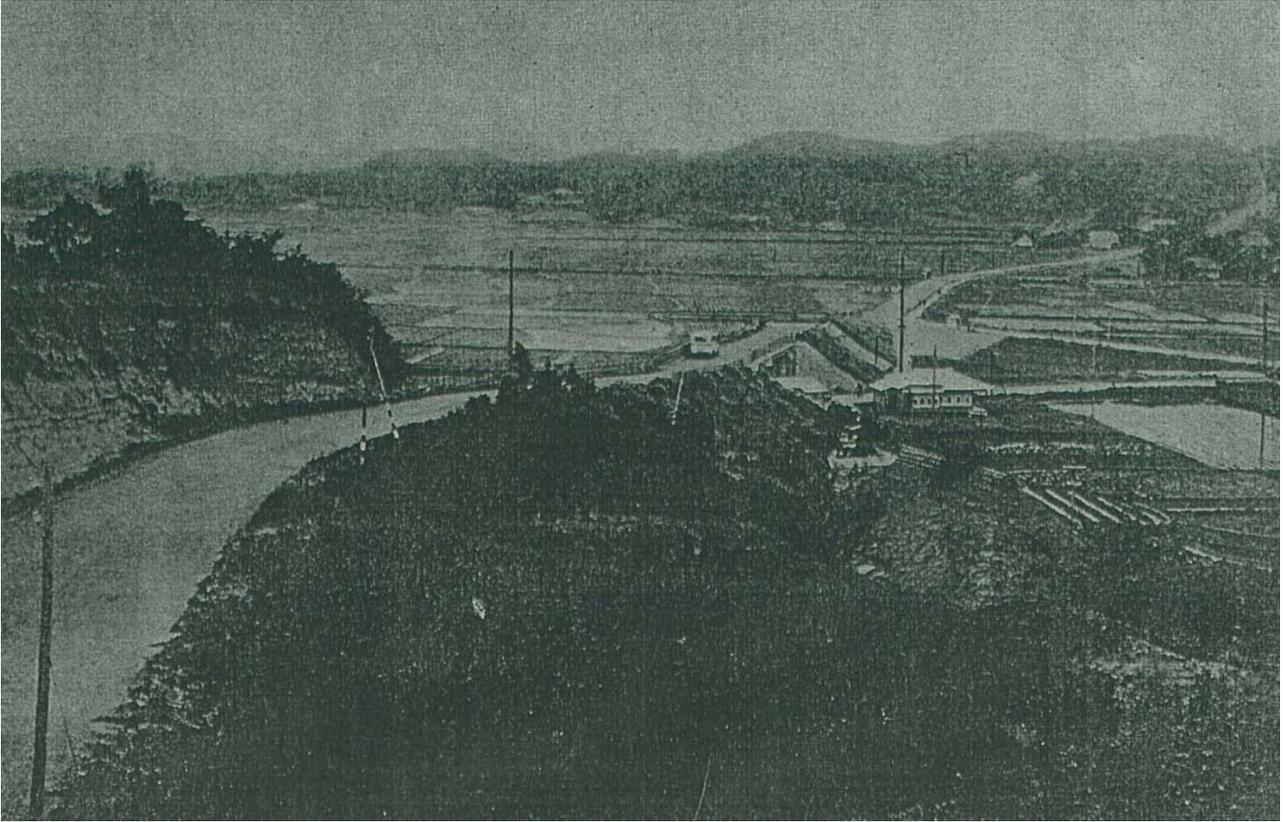
電話銀座一五八三番

神奈川縣鎌倉山住吉

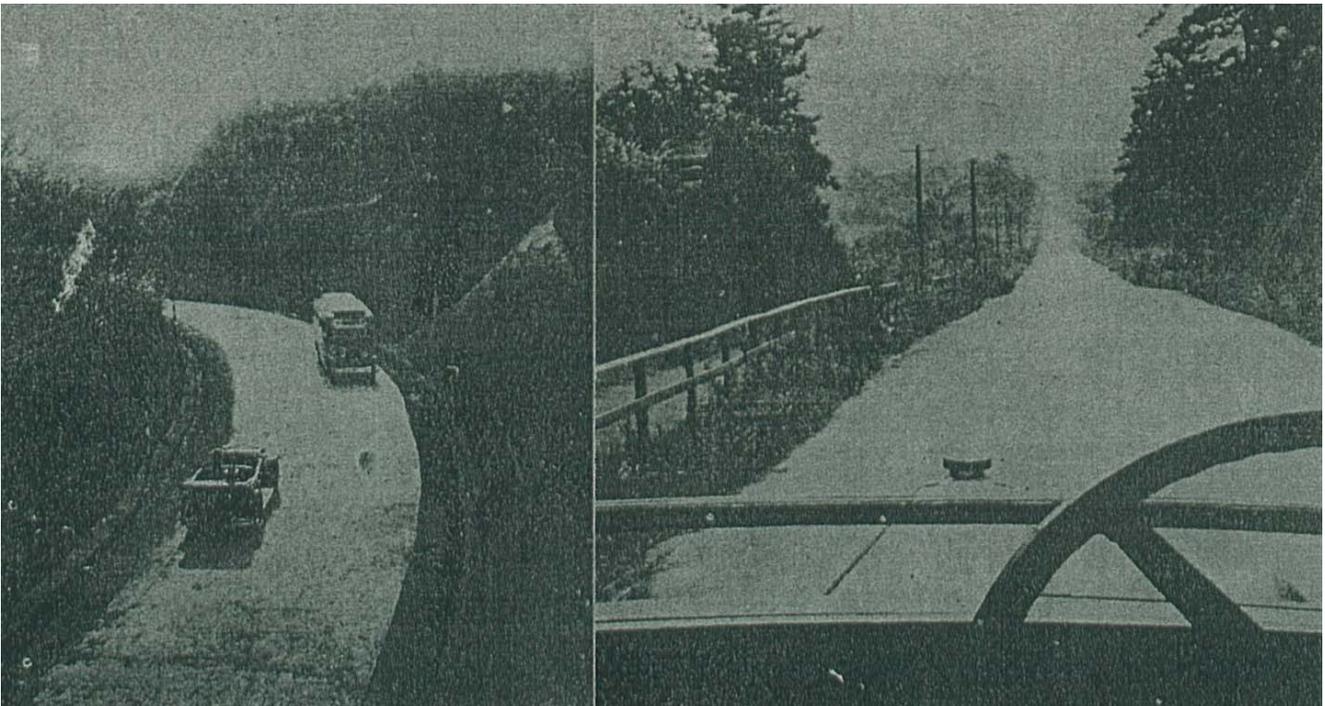
電話鎌倉八一五番



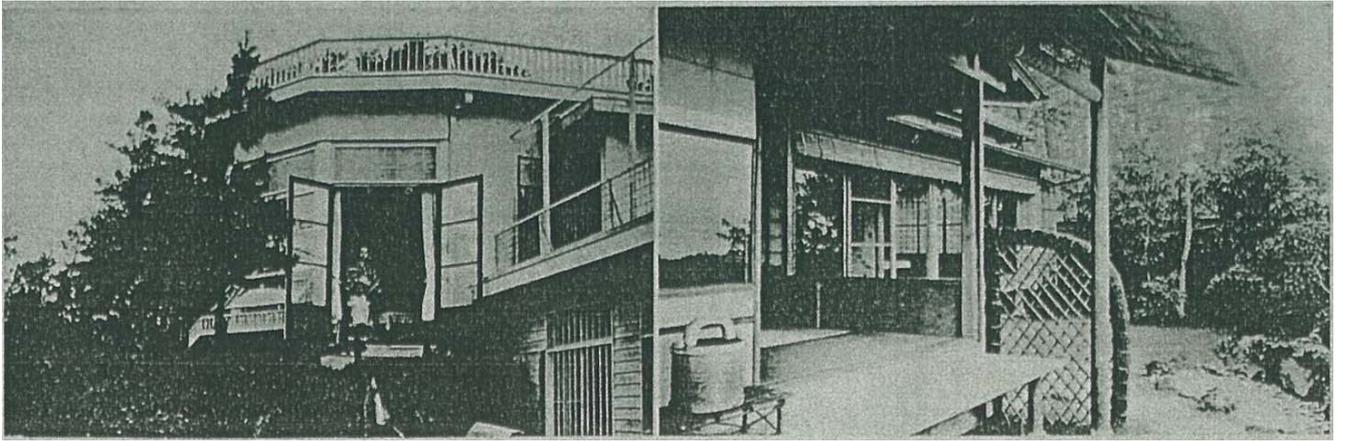
出典：鎌倉山土地株式会社創立事務所「鎌倉山グラフ」



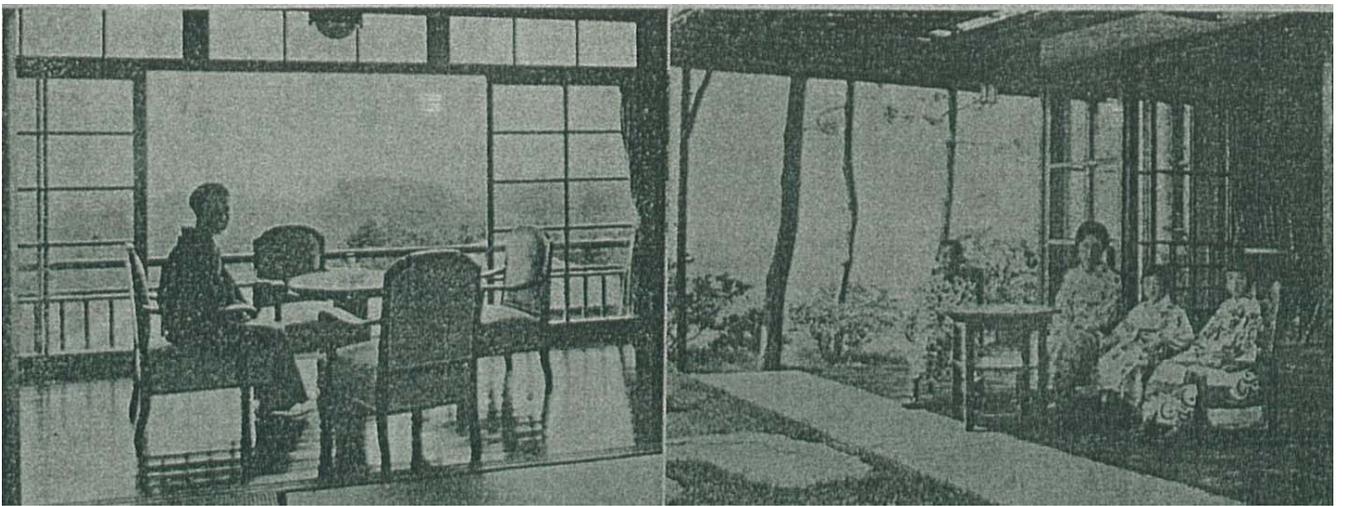
鎌倉山の日本最初のドライブウェイ



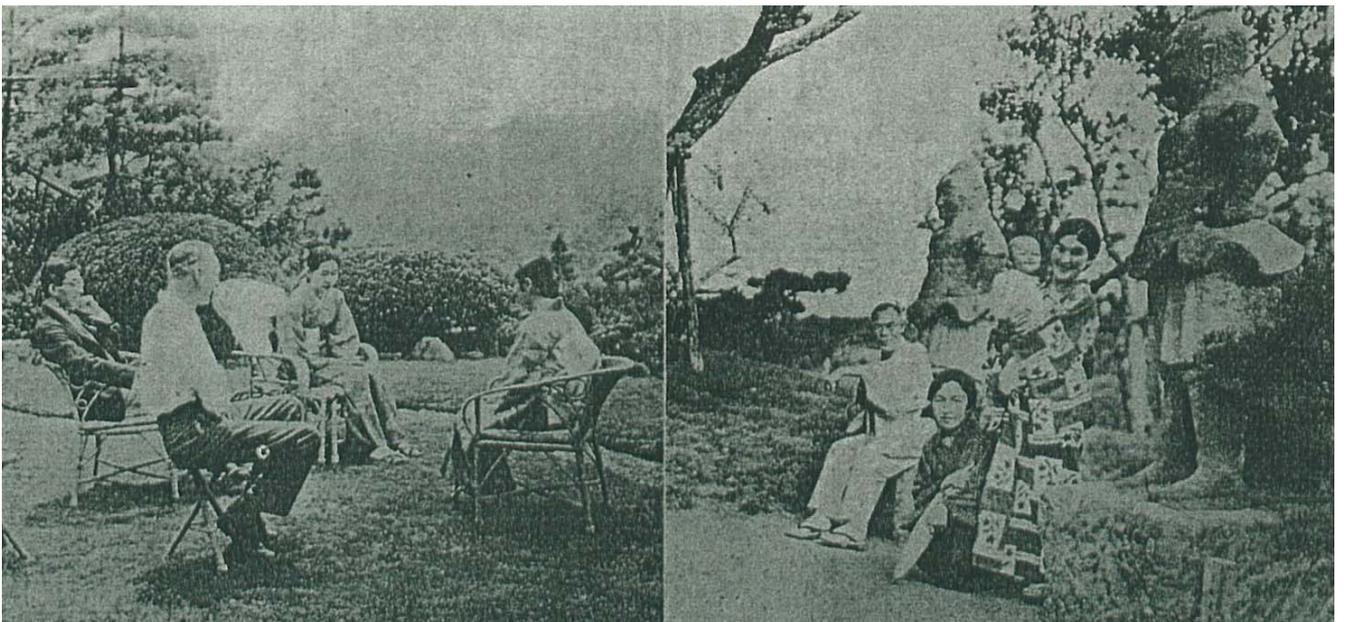
舗装完備の自動車道



和風洋風両様式の特徴を持つ住宅



住民生活の様子



住民生活の様子

出典：鎌倉山土地株式会社創立事務所：「鎌倉山グラフ」

鎌倉における文化人の動向

鎌倉山の開発などをきっかけに、多くの文化人や文士が鎌倉に居を構えたり、文化・芸術活動の場として鎌倉と関わった。

表6：鎌倉に関わりのある文化人等

名前	居住地	
芥川龍之介	由比ガ浜	教師時代に由比ガ浜に下宿。材木座の元八幡近くで新婚生活を送る。
有馬生馬	由比ガ浜、稲村ヶ崎	少年時代を由比ガ浜の父の別荘にて、大正9年に稲村ヶ崎の邸宅に移り没年まで過ごす。
有島武郎	円覚寺の松嶺院	大正8年3月～4月執筆生活のために円覚寺の松嶺院に滞在。
石塚友二	稲村ヶ崎、植木など	昭和20年から没年（昭和61年）まで稲村ヶ崎、植木、玉縄と移り住んだ。
泉 鏡花	材木座の妙長寺	明治24年の夏、上京してから一年間の放浪生活の間に妙長寺に滞在。
井上剣花坊	建長寺	執筆と病気の療養を兼ねて昭和9年に建長寺塔頭の正統院に滞在。
円地文子	材木座	結婚を期に昭和5年3月～11月まで材木座に居住。その後も材木座の父の別荘をたびたび訪問。
大岡昇平	扇ガ谷、極楽寺など	昭和11年に扇ガ谷に下宿。昭和23年に雪ノ下の小林秀雄方に寄寓、翌年極楽寺に居住。
太田水穂	扇ガ谷	昭和9年、扇ガ谷に山荘を設け、14年に移り住み、この地を中心に亡くなるまで活躍。
岡本かの子	鎌倉駅付近	大正12年の夏に鎌倉駅近くの宿に逗留。
尾崎喜八	山ノ内	昭和41年から山ノ内に昭和49年の没年まで居住。
大佛次郎	長谷、材木座など	大正10年から長谷、材木座に居住。昭和4年～48年の没年まで雪ノ下に居を構える。
海音寺潮五郎	雪ノ下	約一年半程雪ノ下に滞在。鎌倉を舞台とする作品を数多く残す。
川上喜久子	宅間ヶ谷	病氣療養のために宅間ヶ谷に借家、昭和7年からその隣に長年居住。
川端康成	浄明寺など	昭和10年より浄明寺に居住。昭和12年～21年には二階堂に下宿し、その後長谷へ移る。
蒲原有明	雪ノ下、二階堂	大正8年に雪ノ下に転入、翌年に街道に移る。震災により一時転出するが昭和20年に二階堂に戻る。
国木田独歩	坂ノ下	明治35年の2月～12月に坂ノ下の御霊神社境内やその近くの別荘に居住。
久保田万太郎	材木座など	東京空襲で家を失い、材木座に移り、後10年間居住。
久米正雄	大町、雪ノ下など	大正14年より大町、雪ノ下と移り、昭和5年から没年まで二階堂に居住。
小島政二郎	二階堂	昭和5年に転入後、東京へ一時期戻すが昭和39年から平成6年に没するまで居住。
小林秀雄	由比ガ浜、扇ガ谷など	大正10年に病氣療養の母とともに鎌倉で過ごし、後昭和6年に由比ガ浜に転入して扇ガ谷、雪ノ下に移り住む。
小牧近江	稲村ヶ崎	大正14年に稲村ヶ崎に転入し、一時期インドシナで過ごした後稲村ヶ崎に戻り没年まで居住。
今日出海	大町、雪ノ下	昭和6年頃小町に居住、後に雪ノ下に移る。没年は二階堂へ移る。
佐佐木信綱	大町	大正10年大町に別荘をもち、創作の場とした。
里見 弴	扇ガ谷など	父の別荘が由比ガ浜海岸に位置し、大正13年から鎌倉の各所に居住。扇ガ谷が終焉の地となる。
志賀直哉	雪ノ下	大正4年に雪ノ下に居住。
四賀光子	扇ガ谷	昭和9年に鎌倉の扇ガ谷に山荘を設け、時折の静養の場としていた。
瀧澤龍彦	小町、山ノ内	昭和21年から小町に居住、41年から昭和61年の没年まで山ノ内に居を構えた。
島木健作	雪ノ下、扇ガ谷	昭和12年に雪ノ下、14年より扇ガ谷に居住。
島崎藤村	円覚寺	明治26年の8月、10月それぞれ一ヶ月程円覚寺の帰源院に滞在。
高浜虚子		明治43年、子どもの健康と生活一新のために鎌倉に移り、50年近く居住。
高見順	山ノ内	昭和18年から北鎌倉山の山ノ内に居住、貸本屋「鎌倉文庫」などに参画し、活躍。
高山樗牛	大磯、鎌倉	健康回復のために湘南に移り、大磯、鎌倉に居住。鎌倉では長谷寺境内に一家を構える。
竹山道雄	扇ガ谷、材木座	昭和19年に扇ガ谷に転入し、24年から昭和59年の没年まで材木座に居住。
立原正秋	大町、小町、扇ガ谷	昭和25年に大町に転入後、小町、扇ガ谷など各所に居住。昭和45年から昭和55年の没年まで梶原に居住。
永井龍男	雪ノ下など	昭和9年より鎌倉に居住、昭和28年から平成2年の没年まで雪ノ下に居住。昭和60年には鎌倉文学館初代館長に就任。
中原中也	扇ガ谷	昭和12年に扇ガ谷の寿福寺境内転入するが、同年鎌倉養生院（現、清川病院）で亡くなる。
中村光夫	稲村ヶ崎、扇ガ谷	昭和8年覺園寺で自炊生活をはじめ、昭和16年に稲村ヶ崎に、昭和32年から没年まで扇ガ谷に居住。
中山義秀	極楽寺	昭和18年から昭和44年の没年まで極楽寺に居住。貸本屋「鎌倉文庫」などに参画し、活躍。
夏目漱石	円覚寺	明治27年に病氣療養のため円覚寺で参禅。後年、この体験を「門」などの作品に残す。
西脇順三郎	大町	昭和17年から19年に大町に居住。
林房雄	大町、浄明寺	昭和7年に大町に転入、一時伊豆に転居した後、昭和11年から昭和50年の没年まで浄明寺に居住。
林不忘	材木座、笹目など	大正15年から材木座、笹目と居住。雪ノ下が終焉の地となる。大町の妙本寺に墓所がある。
久生十蘭	材木座	昭和22年から材木座に居住、材木座霊園に墓所がある。
広津和郎	坂ノ下、山ノ内など	大正5年から坂ノ下に居住、後、山ノ下、大町に移り住む。
星野立子		「鎌倉」「笹目」などの句集を出す。北鎌倉、寿福寺に墓所がある。
松本たかし	浄明寺など	大正14年の夏、療養のため浄明寺に居住。その間、鎌倉の句を数多く詠む。
武者小路実篤	材木座	明治21年から27年にかけて毎夏、材木座の光明寺に寄宿。
八木重吉		明治45年から5年間、神奈川県師範学校で寮生活を送る。その時代に日本メソジスト鎌倉教会に通う。
吉井勇	材木座	明治20年頃から材木座の別荘に滞在、24年に鎌倉師範付属小学校に入学。東京に移るが療養などで鎌倉に度々訪れる。
吉田健一	二階堂、西御門	昭和21年から二階堂に、22年から28年に西御門に居住。
吉野秀雄	小町	昭和6年に小町に転入、鎌倉短歌会を起こす。鎌倉アカデミア文学部教授を4年間務める。瑞泉寺に墓所がある。
与謝野晶子		有馬生馬邸や友人の別荘を訪れるなど鎌倉をたびたび訪問。鎌倉を詠んだ歌を数多く残す。

出典：鎌倉市資料